トルヴェール・クヮルテットコンサート

ピアノ：小柳美奈子

バーレスク……プラネル

アンダンテとスケルツォ……ボザ

四重奏曲……ラヴェル
（編曲：新井靖志）

トルヴェールの四季……ヴィヴァルディ
（編曲：長生 淳）

春

2001 四季のコンサート

2001年4月14日（土）6:45PM
会場：浜松市教育文化会館
主催：浜松音楽友の会

プロフィール

1987年6月サクソフォンのソリスト集団として結成。'89年、東京文化会館小ホールにてデビュー・コンサートを開催以来、各地でコンサート、ＴＶ出演、レコーディング等で活躍中。'92年、東京国際音楽コンクール「室内楽」において第2位入賞。日本吹奏楽学会主催による第5回日本吹奏楽アカデミー賞「演奏部門」受賞。幅広い活動を行い、東芝ＥＭＩよりＣＤ発表ごとに着実にファンを増やしている。

須川　展也（ソプラノ）
東京芸術大学卒業。第51回日本音楽コンクール、第1回日本管打楽器コンクール最高位受賞。高度なテクニックと洗練された音楽性は世界的にも高い評価を得ている。東京芸術大学講師。東京佼成ウインドオーケストラのコンサートマスター。

彦坂眞一郎（アルト）
東京芸術大学大学院修了。安宅賞受賞。CBSソニー「ザ・ニューアーティスト・オーディション'88」においてＦＭ東京賞、クリスティン・リード賞受賞。昭和音楽大学、同短期大学講師。ボイスネシア・トリオのメンバー。

新井　靖志（テナー）
コンセルヴァトアール尚美ディプロマ・コース卒業。赤松賞受賞、尚美コンクール管打楽器部門第1位、第4回日本管打楽器コンクール第2位受賞。母校及び長野県小諸高校講師。シエナ・ウインドオーケストラのコンサートマスター。

田中　靖人（バリトン）
国立音楽大学卒業。谷田部賞受賞。第1回日本管打楽器コンクール第2位、第4回同コンクール第1位受賞。東京佼成ウインドーオーケストラのアルト・サクソフォン奏者。近年はソロ奏者としても活躍。

小柳美奈子（ピアノ）
東京芸術大学卒業。アンサンブル・ピアニストとして、様々なプレーヤーのリサイタルやレコーディングに活躍中。

トルヴェール・クヮルテット
コンサート

TROUVÈRE QUARTET
CONCERT

曲目解説　宮本賢二郎

●プラネル／バーレスク

プラネルは1908年に生まれ、世代としては近代最後の作曲家に属するが、伝統を重んずるフランスの作曲家たちの中でも特に保守的な作曲家といえる。この曲は1942年にマルセル・ミュール　サックス四重奏団の依頼により作曲されたが、バーレスクとは「道化者」とか「滑稽な」という意味をもち、音楽としては、クラシックというより当時の滑稽な無声映画のための音楽やサーカスの音楽の雰囲気をよく再現している。当時のパリの聴衆たちは、タイトルを聞いただけで、無声映画の俳優やサーカスの曲芸師のコミカルでスリリングな動きを想像して、大いに楽しんだに違いない。このような発想も、当時サックスが実際にサーカスで大いに活躍していたことから由来しているのだろう。その意味では、まさにサックスならではの音楽的ユーモアといえる。

●ボザ／アンダンテとスケルツォ

1905年に生まれたウェジェーヌ・ボザは、パリのコンセルヴァトワールをまずヴァイオリンで卒業した後、指揮・作曲をさらに学んだ。その後、パリ　オペラ・コミークの指揮者として活躍する傍ら、多くの作品を残した。1930年代後半から本格的に作曲活動を始めた彼の作風は、後期ロマン派の壮大な音楽とは対照的に、フォーレ、ドビュッシーの和声の影響を色濃く残しつつも、簡潔な構成、明るく流麗なメロディ、軽妙なリズムが特徴といえる。オペラ、バレー、シンフォニー、室内楽と多くの分野で作曲しているにもかかわらず、現在では管楽器のためのアンサンブル、ソロ小品の作曲家として知られている。1943年に作曲され、初期作品に属するアンダンテとスケルツォは穏やかで牧歌的なメロディが対位法的に繰り広げられるアンダンテと、軽快なリズムのメロディが近代和声のめまぐるしい変化の中で盛り上げられていくスケルツォの二つの楽章から成る。この作品は、サックス属というアンサンブルに極めて高い表現力を持った楽器を得たボザが、ヴァイオリニストとしての経験を生かし、弦楽四重奏の手法を取り入れつつ、サックス・アンサンブルの可能性を引き出した意欲的な作品と言える。

●ラヴェル／四重奏曲　（編曲：新井靖志）

1904年ラヴェル29歳の年に作曲され、師フォーレに捧げられた。原曲は弦楽四重奏であり、第一楽章の流麗かつ感傷的なメロディが、第二楽章ではリズミカルに、またピチカート（弦を指ではじく奏法）などで奏され、次第に激しさを増していく。ゆったりした第三楽章は瞑想的な雰囲気から始まり、随所に第一楽章のメロディが現れ、またチェロ（バリトンサックス）の情熱的なソロが聴かれる。一転して激しい第四楽章ではやはり、第一楽章のメロディが変奏されて繰り返し現れ、終結に向けて激しさを増していく。

この曲は、ピアノのソナチネ、弦楽四重奏とフルート、クラリネット、ハープのための序奏とアレグロなど、初期の名作と共通したスタイルをもち、明確な構成と、流麗で感傷的、そして叙情性と神秘性を併せ持った旋律が、フランス音楽の伝統を引き継ごうとする若きラヴェルの感性を物語っている。

●ヴィヴァルディ／トルヴェールの四季　（編曲・解説：長生 淳）

原曲はお馴染みの協奏曲集「四季」。これらの曲をもとに、長生 淳によって色鮮やかなアレンジが施されている。ヴィヴァルディの原風景を時には誇張し、ジャズやロックといった現代の音楽要素や、童謡や賛美歌の断片、アジア的な色づけといった遊び心を加えている。原曲に親しんでいる人にとっては、何かワクワクするような展開。そしてあまりクラシックを聴く機会のない人にとっても親しみやすく、心から楽しめる「四季」である。

「春」　小鳥の歌、そよ風のささやき、春雷、春の喜びを表す4つの短詩。　～春の日差しを浴びて羊飼いが眠っている。　～春の日の下で踊る妖精や羊飼いの舞曲。

「夏」　暑い日差しにあえぐ人々。そして森に響くカッコウの鳴き声。　～休んでいる農夫が歌を口ずさむ。遠くでは雷の音がかすかに聞こえる。　～激しい嵐に農作物は荒らされる。

「秋」　田園の風景。収穫を喜ぶ農夫たち。　～美しい田園の叙情。　～冬に備えての狩猟。

「冬」　木枯らしが吹くなか、暖炉を囲んで楽しいひとときを送る人々。　～外は吹雪、そして暖炉の前で詩人が思いを巡らせている。　～氷の上を駆ける人々。風が吹きすさぶ。